

吉井勇論 (六) — 第一章 家系 その六 —

A Study of YOSHI Isamu (6) : Chapter I, His Family History (part 6)

鷺 只 雄

Tadao SAGI

はじめに

私はこれまでに吉井勇について二つの拙稿(吉井勇『酒ほがひ』
〔明43・9・7 昂発行所〕に全注釈と解説を施した拙著「明治書
院・近刊予定」及び「吉井勇論序説——初期習作と家系をめぐっ
て——」〔平8・3・14「国文学論考」32号〕都留文科大学国文学会
参照)を書いただけの、短歌にも、勇にも全くの門外漢であるが、
その素人の気楽さから率直に言わせてもらおうと、吉井勇の研究は非
常に遅れていて、伝記の面でも作品研究の面でも基礎的、基本的な
調査さえ行われていないのが現状である。勇の第一歌集『酒ほが
ひ』に全注釈を施す仕事をしてみて、そのことが肌身にしてみてもわ
かると同時に大いに困惑した。家系や伝記について信頼すべき調査は
殆どなされておらず、勇の回想に従っているのが実情で、そのため
回想には思い違いや齟齬が多く、それが何時のことなのか、それが

本当なのかどうか、判断できない事態に遭遇することになったから
である。

また作品についても同様で、作品の初出調査もごく一部になされ
たのみで、永く放置されたままであった。

そうした状況からの前進をめざして前掲の拙稿では資料の新たな
発掘と調査とを試みた。これに対して早速、歌人で短歌史研究の重
鎮である篠弘氏が「東京新聞」の「短歌月評」(平9・1・5 2
面)で、

子規・左千夫・茂吉をはじめとする根岸短歌会にたいして、新
詩社の「明星」派の歌人研究が遅れている。天折した啄木ぐらい
ではないか。『白秋全集』が完結した白秋もむしろこれからであ
る。鷺只雄「吉井勇論序説——初期習作と家系をめぐって」(都留
文科大学「国文学論考」32号)といった研究が、ようやく出現し

てきた。

として、紹介して下さったのは望外の幸であった。もっぱら二十世紀の小説を研究対象としてきた専門外の私にとつてはこれは大きな励ましであり、稿を続ける上での支えとなったからで、氏のご厚情にあらためて感謝しておきたい。

前稿にも記したように、吉井家の家系——特に祖父友実についての膨大な資料と、父幸蔵についての資料については、既にマイクロフィルム化して入手しており、目下解読・整理中であるが、B4判で恐らく一万枚を越すと思われる分量であり、書類・書簡の年月日決定・更に殆どが達筆な毛筆で書かれていて、その判読に時間がかかるなど困難な問題が山積しているため、それら全てが解決してから発表ということになると、いつのことになるかわからないので、とりあえず、祖父友実の日記を整理要約して彼の生涯の行実を明らかにした上で、周辺の事実を積み重ねていくことにしたい。

祖父友実から始めるのには、幕末まで「薩摩藩の軽輩」(吉井シヅ子「勇の母」)「私は百二歳・一世紀を生きてきて」昭和42・3「文芸春秋」引用は山崎朋子編『女の生き方40選 上』平7・4・10 文春文庫 による)であった吉井家を友実が、西郷隆盛や大久保利通と共に国事に奔走して大いに家名をあげた中興の祖であるからで、彼は明治天皇の信任厚く、伯爵となり、元老院議員・日本鉄道会社社長・宮内次官・枢密顧問官などを歴任した(一八二一年生まれ〜九一年没)。

また、友実の言によれば「歌の師」(「解説」昭27・7・25『吉井勇歌集』 岩波文庫)でもあるからで、実際残された資料からみても、友実は自由に歌を作り、知友と歌会を催し、絵を描き、

歌日記や紀行文をものするなど、殺伐無風流な薩摩隼人とは大いに趣を異にし、風流韻事を楽しむ風雅の士でもあったことを証しているからで、その点からも友実の究明は重要であるが、その点については前掲の拙稿でふれたのでここでは繰り返さない。

ここで友実の日記というのは宮内庁書陵部蔵『三峰日記』のこと、一から七まで全七冊あり、明治2年2月26日(本文を除いて題簽類は「自明治二年五月」と記すが、これは臨時帝室編修局で大正一一年一一月に吉井家から借用して転写した際に誤記したものと思われる。というのは本文は「明治二年二月二十六日」から記述されているからである)から明治21年1月10日まで記されている。無論、途中の脱落も多い。

先程もふれたようにこれは原本ではなく、毛筆による転写本なので体裁については簡単にふれておくと、和綴じの冊子本で、タテ27・3センチ、ヨコ20センチ、タテ罫一頁10行。第一巻の本文記載頁数は137であるが、これは巻によって多少の異動がある。参考までに記すと、日記の本文記載頁数は次の通り。

- 一——一三七頁(明2・2・5・5)
- 二——一五二頁(7・3・7・12)
- 三——一五九頁(12・1・12・12)
- 四——一六六頁(13・1・13・11)
- 五——一四三頁(14・1・14・9)
- 六——一八四頁(16・1・16・12)
- 七——一八〇頁(17・1・21・1)

繰り返して言うが、以下の日記の記述は「三峰日記」の翻刻では

なく、私が必要と思われる部分を取捨選択の上、それを整理し、要約したものである。原文を一、二例示する。

明治二年二月二十六日

中将公前浜御乗船正午御出帆同二八日夜十二字大坂川口へ御着船
同二九日御上陸本願寺へ御宿陣相成ル

岩倉卿御在坂ニ付淀橋御上り場ヨリ直ニ御使者被仰付
長州侯二ハ二六七日頃御上京相成候由承ル

永山源藏へ公用人被仰付候御書付相渡ス岩倉卿へ二ヶ條之御趣意申
上云々ノ御返答アリ

三岡八郎會計方被免長岡左京御召捕相成タル由

函館千人計決死其外瓦解ノ勢ニ候由

東京奥羽之間平穩

攘夷家盛ニ成立有志会ナド有之候由

木戸未タ帰京無之広沢病氣ノ由

同年三月五日

林良輔野村右中建白書持参今晩入御覽候所願クハ両藩御寵遇之願意
列藩へ推及一視同仁之叡慮貫徹仕候様之御趣意書加へ方御沙汰有之

原文は右のような漢文訓読体・漢文体・候文体などの混淆した独特の文体で書かれており、また、日記であるために人物の説明などがなく、しばしばイキナリ固有名詞が登場するために理解の困難な部分もある。

凡例

以下に本稿の日記を記述するに当たつての凡例を示しておく。

- 1 原文の趣を出来るだけ尊重して文語調を模したが、表記は新字、新仮名とした。但し、詞書、和歌などについては原文通り旧仮名とし、その他の場合についてはそのつどことわった。
- 2 友実の行実を主としたために、それからズレルものについては、カットしてあることをおことわりしておきたい。ただし、固有名詞についてはできるだけ拾い上げることにした。
- 3 外国の地名の表記で確認できるものについては、可能な限り今日の表記に改めた。同じく人名については確定しがたいものが多いので原文の表記のままとした。
- 4 誤記・誤脱と思われるものについては改めたが、中には（ ）を付して、その中に正しい表記を示した場合もある。
- 5 時刻表示は1→24時制とした。
- 6 （ ）内の記述はことわりがない限り、鷲の付した注である。
- 7 以上がそのあらましであるが、これ以上の件についてはそのつどことわった。

以上のようなまきがきと凡例を付した「はじめに」をつけて拙稿「吉井勇論（1）第一章 家系 その二」（97・3・31「都留文科大学大学院紀要1」）同「吉井勇論（2）第一章 家系 その二」（98・3・23「都留文科大学大学院紀要2」）「吉井勇論（3）第一章 家

系 その三」(99・3・23「都留文科大学大学院紀要3」)「吉井勇論(4)第一章 家系 その四」(00・3・25「都留文科大学大学院紀要4」)「吉井勇論(5)その五」第一章 家系 (01・3・25「都留文科大学大学院紀要5」)を発表した。本稿はそれに続く第六稿で、明治17年1月1日〜同21年1月10日までの期間のものである。本稿で「三峰日記」の抄約は終りとなる。猶、冒頭に記した拙著『桐の花・酒ほがひ』(明治書院・和歌文学大系29・今西幹一氏「桐の花 担当」との共著)は98年4月15日に刊行された。

七

明治十七(1884)年(承前)

1月1日 天気快晴、子女等の賀を受け、酒を飲み、十時頃より家を出て、平川天神に参拝。元田侍講に至り、年礼を述べ、昨年十二月に拝承の西郷寅太郎、一条熊吉帰国の件に話が及び、本年は明察を乞いたしと話す。それより上野へ行き、中熊で午餐。王子まで乗初をして晩景帰宅。昨夜より今日にかけ寒気烈し。

1月2日 午後地震あり、甚だ強震。今夕、浜町常盤亭にて諸会社集会、福地、益田、洪沢、三井等、五拾余名来会。帰途、木挽町の汐湯に一浴して帰る。

1月3日 山王社へ参拝。麻布辺廻礼、一柳宅にて松方と同席、建築一条伊藤へ談じてくれるよう依頼に及ぶ。

7月8日 宮内大輔に任じられる。

7月17日 華族に列せられ、勲功によって伯爵を授けられる。東

京府貫族仰せつけられる。右は太政官並に宮内省よりの達しにて、誠に有り難き事にて祖先並に先考へ対し孝、且つ郷党へ対し面目の至りなり。

8月8日 今日始めて(欠字)明宮様へ拝謁、退出の際、馬車に乗る所を見たいとの御希望により御玄関迄出御されたのに驚く。

8月9日 宮中に於て婦人制服の評議あり、いよいよ御決定なさるべしとの事になるが、伊藤も是には心配という。宮島が参事院勤務との事、伊藤より承る。今夕、富田鍔之助の主催で星岡茶寮に会す、大槻兄弟、勝三、野村等同席。

8月10日 宮島を同伴して、元田を訪う。婦人制服等の談に及ぶも大いに安心の容子、晚餐を喫し、それより土方へ例会に行く。

8月12日 鉄道会社の再度の総会に出る。六時(十八時か?)に異儀無く閉会。帰途海水浴に行く。

8月13日 終日雨風加わり、天気甚冷に、冬服を着て此夜宮島にて晚餐。

8月14日 今日十五時頃より海江田信義宅にて神官、僧侶の会合に北白川宮はじめ縉紳来会す。宮地某神道を説き、禅僧無学仏教を説く。島地黙雷の演説は不聴して帰る。

北畠道龍も来る。此日、恒庵星岡茶寮に於て小集を催す。衣笠豪谷、大野父子等来る。日を追って清仏の葛藤迫れり。己に仏兵台湾の鶏籠を陥れり。然れども未だ宣戦に至らず。

8月15日 午後宮島と木挽町海水浴に浴す。帰途、三河屋にて晚餐。

8月16日 宮中に於て、伊藤に宮島弥参事院奉職の儀を依頼す。午後、小松宮へ参殿し、一月三日記念会の件を相談す。林友幸、五条、城多等来会。

8月17日 終日閑居、山水二枚を作る。晚景木挽町塩湯に浴す。帰途山（崎―脱落か？）楼にて晩食、雨降り出す。久留米の人、岩橋侍香来る、国学者にて公平論を持する人なり。

8月18日 今日午後より香川郷純造、伊藤巳代治等を星岡茶寮に招く。宮内卿、侍従長は不来。豪谷、春農両画工も来る。終日雨天、冷氣甚し。清仏、上海にての談判已に破れんとするの電報ありしと。

8月19日 本日両大姉正忌辰祭事を行う。此夜、梅塘、栗香、恒庵を招き、飲む。

8月20日 本日より、高崎―前橋間開通により会社から招待される。朝五時に家を出て上野で朝食、六時二十分発に乗り、十一時前橋着。嬉野楼にて午餐。井上局長も伊香保より来る。余は十五時に同所を立ち、伊香保に赴き、薄暮島平着。当年は鉄道便の開通により浴客大に増したりとて木暮八郎等大いに喜び居たり。今日、宮島、栗香、家族を連れて浴遊。余、栗香の房に同居す。

8月21日 終日、楼上に閑居。前山を望む、其景愛す可し。午後、

大山を訪い、湯源に入り、紅葉館に登り、晚餐。中川亀三郎に面会す。数年ぶりなり。七子で一局打ち、持（引分け）なり。又、其角堂に遭う。

8月22日 十三時前出立し、渋川より馬車に乗換え、前橋停車場着。本間、白杉、来る。直に乗車、二十時過ぎ上野着。中熊にて晚餐、二十二時帰宅。清仏談判破れたりとの報知追々到来。

8月23日 本日より、清仏遂に開戦の報あり。実に東洋の困難なり。今後如何なる景況に推移るべきか。午後、川村を訪い、又、松方、本田、得能、税所を訪ねて晩暮帰宅す。

8月24日 大山、三年祭につき、午前墓参、此夜大山にて食事。
8月25日 十七時ごろ木挽町塩湯に行く。休業にて空しく帰る。山崎楼に登り、暫時休息して帰る。

8月26日 今日午後、星岡茶寮にて城多、山本の会主にて、品川、土方等集会、岩公履歴取調方相談あり。今日、暴風により名古屋以西は電気不通、故に清仏戦争の模様不明。」服部長七、土木に長じたる者の由、品川の話なり。此者人造石を以て業となすと云う。日本支那朝鮮等の地図を奉る、福州鶏籠等の戦地の図卿高覧ありたき旨申上げる。

8月27日 安南の地図を奉る。今度の戦争は涼（諒か？）山より起り候につき、その点御高覧の上、御周知ありたき旨萩に重々話しておく。芝、汐湯に一浴。松方へ行き、晚餐、閑話数刻。

明治十八(1885)年

- 1月1日 朝五時参朝、晴の御膳の御式に詰める。七時に拝賀。八時に公爵、勅任官拝賀。十時奏任官。十四時より再出御して奏任官拝賀。十六時悉く相済み、天気晴和。
- 1月2日 八時より侯爵、御雇外国人等拝賀。十二時帰宅。午後、皇族大臣等へ年礼に廻る。明宮に拝謁。伊藤不快、病床にて面会。
- 1月3日 元始祭、十二時前相済。本日麻布辺廻礼。今夕、紅葉館で慶新会あり、出席。
- 1月4日 本日休暇。牛込、駿河台辺廻礼。磯部温泉にて囲碁。
- 1月5日 新年宴会、内外人百余人参内。此夜、税所にて祝宴。
- 1月6日 宮内卿病氣に付代理として内閣へ出席。
- 1月7日 御講書始、元田、福羽、西村進講。福羽は令の考課の章を、元田は舜典を、西村は文明論を講ず。昼より降雪。
- 1月8日 今朝、降雪は二尺ばかり。依って陸軍始には出御なし。終日閑居、晩暮、税所、伊地知恒庵、北岡等来る。
- 1月9日 御内儀へ出頭せよとの御事につき参候所、紅梅典侍を以ってコーヒー茶碗一箱、御袴地一反、煙草入一個、酒、餅等賜る。
- 1月10日 十四時頃より、税所と同車して北岡の別荘に遊ぶ、此夜一泊。
- 1月11日 北岡にて終日囲碁、揮毫等にて閑遊。佐久間玉忠等も来る。帰途、中熊に立寄り、お駒死去に付、金五円を遣わす。

1月12日 雁一羽賜る。常盤亭にて画会。朝鮮談判、相整たる電報受信の旨、伊藤、松方より聞く。松方と琉球事件相談、宮島清国公使と筆談の件も話し置く。

1月13日 鵬北、栗香、恒庵等と山崎にて囲碁。

1月14日 今夕、近衛篤磨殿近日訪欧に付送別会を開く。会する者、勝、税所、西郷兄弟、北岡等なり。西幸吉、琵琶を弾ず。

1月15日 川上氏より招かれ、川村、岩下等同席す。それより沙湯に浴す。此夜、梅塘の画会に招かる、雨谷も来る。幸藏よりの書状達す。

1月16日 今朝、伊藤を訪い、井上等帰朝之節の下され物一条並びに帛太郎米国行きの件相談す。今日参事院へ臨幸。御剣拝見仰せつけらる。此夜、宮島の招待で浜町常盤亭に行く。

1月17日 皇后宮御居間にて拝謁。旧冬、名保の御召しの節の御礼申上げ、且つ井上等復命の節云々申上げ置く。敦子へ面会して雪中早梅の歌を見てもらった処大いに面白という。今夕、鹿鳴館へ有栖川宮、並びに三条殿より御招きに預かる。

明治十九(1886)年

- 1月14日 今朝、文部大臣に面会、土方よりの書簡を見せて意見を求めるに、森曰く「順従友情威儀此三徳を備えたる者を以て教官に充つる積なり」と。
- 2月2日 新宮御料地へ鴨狩として臨幸、近衛仕官を召さる。丸

山作樂、図書助に任せらる。

9月7日 両陛下へ拝謁、御暇乞。申上げる。大臣にも挨拶に行き、淡路島へ大津分宮を移転の件、並びに南部海口防禦の儀を申述べ置く。此夜、税所、宮島、伊地知等来り、会食す。大山も来る。

9月8日 朝三時に起き、上野発五時二十分の汽車に乗り、矢板で武に一寸面会す。那須より黒磯迄土運車に乗り、同所より人力にて十七時白川着。郡長富田通信来り、万事周旋す。

9月9日 朝六時頃出発するも、寒氣強し、岩瀬御用地へ立寄り、勝野に面会す。郡長田中来る。それより本宮、二本松にて小休止、十七時福島着、浅草に投宿。今井書記官、吉田弘藏等来る。掛物二幅を買う。

9月10日 五時に出発し、十時に栗子隧道を通過。米沢で午餐。赤湯まで山形県書記官横川源蔵迎えに出、夜に入つて山形着。片山書記官来訪。

9月11日 六時に出発、新庄にて中食。郡長の先導で塩野が原を一覧。新庄より雨甚だしく、金山にて小休止、山道に掛る登り道を喘ぎながら登り、宿に着く。

9月12日 六時に出発、院内越にて十時頃湯沢に着き、ここで中食、横手で小憩、十六時大曲到着。青山知事出迎。

9月13日 朝、大曲を出て、横手の坂下まで大勢出迎う。ここより青山知事と馬車に同乗して秋田に入り、佐伯某の家に投宿。

9月14日 朝、平田篤胤翁の墓に詣るに、門人某、丁重に洒掃せ

り。城山に登り、市街を瞰視す。夜、北畠道龍来話す。

9月15日 朝八時より、裁判所、学校、感恩講等を巡視。午後、有志者の招待を受く、盛宴なり。秋田盆踊見る。夜、北畠道龍来る。

9月16日 八時に青山（引用者注―知事であろう）と同道、招魂社へ参詣、ここに競馬あり。池鯉亭に午餐す。時に馬躍りて席上に入る。主人悦び、歌よみてと言ひければ

真直なる宿の主のこゝろをば

志りてやこれをもどり来ぬらん

此地を立ち、八郎潟を右に見て夕景舟川に着く。直に舟を用意して暗礁を見る。

9月17日 今朝、舟川出立、寒風山に登り、秋田随一の官林を遠望し、暫く山上に休息、阿仁山其他四方を眺む。津軽の山も見ゆ。舟越村にて午餐し、十四時過ぎに菅礼次宅にて土崎有志の饗宴あり、盛会なり。明朝出立に付き、早く辞し去れり。帰宿後、追々来訪者あり、二時前に寝につく。

9月18日 今朝秋田出立、士族開墾所一覽に金五円を恵む。荻和野に午餐し、横手に一泊。此夜、八代隆太と云ふ老人に詩を送られる、金二円を贈る。

9月19日 横手出立し、平和街道を通る。雨降り、甚難儀せり、十七時頃黒沢尻着。県会議長等の馳走あり。又、菊池金吾も来る、七十余の老人なり、当春禁苑の松苗を下

賜され、能く根付きたるにより、是非岩手まで来り、見よとの乞いなれども、急ぎたるを以て謝罪せり。然るに岩手より十二里の遠路をここまで来り迎えしなり。

9月20日 朝、黒沢尻を發し、一ノ関へ午前に着。石井知事ここまで送り来る。これより北上川を舟にて下り、薄暮石巻に到着す。有志者の饗宴あり。

9月21日 小蒸氣船に乗り、石巻を發し、野蒜運河を通り、松島灣を過ぎ、塩釜着。蒸氣土運車により午前仙台に着す。増田技手に面会、松平午餐を振舞へり。それより又人力車を馳せ、白石に日暮れて着す。

9月22日 五時に白石を發し、九時前福島着。永峰書記官に面会し、暫時談話。二本松にて午餐。ここより須賀川泊の予定を変え、白川泊となす旨電報を打つ。十九時白川着、富田来る、随分疲労せり。

9月23日 今朝、白川出立、郡長富田境目まで送り来る、地面一条頼み置く。黒塚よりドコービルにて走り、三島に着く。それより塩原へ行く。高崎、税所、宮島、伊地知等待居たり。此夜大騒ぎ、相良も来る。

9月24日 終日、塩原に遊ぶ。此夜また大騒ぎ。

9月25日 今朝、栗香、恒庵と十時過ぎ塩原を發し、高崎の旅寓を訪い、告別し、関屋に少時休息。三島にて午餐、十五時一分の汽車にて帰京す。又、鍋島夫人小山より乗車、二十一時過上野に着す。榊、大脇、宮い迎に来居たり。

9月26日 伊藤へ行くも不在、直に参朝拝謁後、復命す。山鳥十羽、右献上。秋田藩の菓子、右皇后宮に献上。内閣へ出頭、総理大臣へ面会、帰京之御届す。

9月27日 今夜、税所は百日祭につき、栗香、梅塘、恒庵等同行晚餐。

9月29日 今夜、恒庵来り囲碁。

9月30日 十時、工商会社に画幅を見る。帰途、木亭にて晩食。一昨日帰京之者ありとて此夜面会。

10月31日 山崎屋より舟にて、ます、な津、ゆふ、みつなど召連れ、税所と向島水神の八百松に上り、晩食す。

11月1日 皇后宮、陸軍病院、博愛者病院へ行啓之儀、聖上へ申上候処、其前に近衛病院へも参候方宜しかるべしとの御沙汰なり。実に難有次第に候。今夜、吹上にて曲馬、天覧され、虎の子を皇后御撫で遊ばされ候。

11月2日 今夜武田来る、面会せず。青木へ行き、又伊藤へ行く。香川、北島、佐々木の妻等来る、胸掛腕輪等持帰る。

11月3日 天気晴朗、八時三十分御出門、觀兵式に臨まれ、十時過ぎ還幸。直に御内儀に於て、皇族、勅・奏任官拝謁、十一時御宴会、十二時入御。此夜、鵬北、栗香、恒庵来り祝宴。二十一時鹿鳴館夜会に赴き、二十四時帰る。

11月4日 北川、林来る。今朝、総理大臣へ行き、宮城より奥の鐵道一件相伺安心せりとの事。聖上、少々御肩凝のため、出御なされず。一島未来記を購求し、閲読。得能、老母病危篤なりと申来る。

11月5日 今朝、秋田県警部長小川弘永来る。得能妻（注―前日は母とあるが、真疑未詳）危篤之由につき今朝見舞いに行く。此夜イリス商会へ晚餐に招かれ、長岡、伊集院等と同席、望遠鏡一個贈らる。今日、名保、皇后宮より召され、歌子の日本上古の御話の後に酒肴を賜った由。余は半ばにて退出。

11月12日 大風雨、大臣参らず。午後、皇后宮へ拝謁、秋田表の形況申上げる。又、谷干城より書状相届候間、御覽に入れ奉るべき旨申上げる。御菓子賜り、是は昨日伏見宮にて貰ひ候を持ち帰りしもの、妻子に食べさせよとの御沙汰有り難き次第に候事。

11月6日 十五時より観菊会、コーヒの御間にて接待あり。聖上、皇后御歩行、還幸には聖上御馬。内外人凡そ七八百人も来る。此日、名保も西洋服にて、皇后の後より参る。

11月13日 今夜、高木兼寛より鹿鳴館へ招かれ、晩食。海軍省の人多し。榎本と戯球す。今日、御写真の事を又申上げる。此節は御請宜しく近々写すべしとの御沙汰にて安心せり。

11月7日 嫡孫勇、宮参の祝宴を高輪にて開く。

11月14日 午食後早々、橋場の北岡へ行き、松方、税所、川田小一郎、富田鍔之助等同席す。佐久間と鳥鷲を争ひ、敗せり。此夜月明、水清極めて清雅なり。

11月8日 名保同伴にて横浜へ行き、テーブル掛などをもとむ。価、40円余。此夜、イリス、長岡、桜井、伊集院などを招き、晩餐す。

11月15日 聖上、吹上へ行幸。内閣にて樺山より聞いた軍艦浪速、高千穂展覧の件を伊藤に申し入れる。且つ、海陸軍請負と軍吏との馴合不正の所業がある由、聞き得たる次第を樺山へ通知致し置候事。午後より、遊就館に入り、見物。佐竹より出品の義家、義光、満仲などの甲を見る。余が秋田より持帰りたる、信玄が山本勘介に与えし甲も出ス、珍物なりとの評判なり。

11月9日 今夜、宮島を同伴して大山へ行き、晩餐ノ馳走あり。対州（注―対馬）へ軍艦より発向の筈、総理大臣も出張相成るべきやとの話、国防費七千万円を費サズシテハ相調ハザル趣。

11月10日 聖上伏見宮へ行幸。御能興行に熊坂、熊野等あり。皇族、大臣、宮内勅任官等御陪食仰せ付けらる。御食後、段々議論有りて面白く候事。

11月16日 皇后宮近衛宮所御覧の件、しかるべく思召され候間、御許可ありしなり。黒田へ見舞、爵記を内室に相渡すに、直ちに受け取られ候事。今夜、税所移転の祝宴―会する者、松方、高崎、宮嶋、伊地知等他。

11月11日 今夜宮島にて晩食。鵬北、恒庵、同席す。風雨甚し。大蔵、文部等の話之あり、相場四ッ割の話、又富田鍔之助等の事故云々の事、不審しき事どもこれあり。鴨十五羽、聖上より下され候事。

11月17日 黒田の内室来る。皇后宮、陸軍病院に見舞をなされ、病室を一つ一つまわられ、御言葉をかけられ、落涙す

る者これあり候。午後より博愛者病院へも行啓。今夜、偕楽園にて講義。

11月18日

風雨烈し。川田小一郎へ約束故風雨を犯し、十六時頃行く。高崎五六、税所、高森等も来る。

11月19日

今夜、恒庵、桂谷来る。高木も参り、海軍省云々を聞く。揮毫もなせり。

11月20日

秋田県の人、荷田東丸^{マッ}の古今集等持来る。丸山作樂へ渡し置く。曾我部より書状来る。午後、土方の小石川の別荘へ招請され、伊藤吾宅へ立寄り、同車して赴く。山県、西村、山崎、柳原等来会す。

11月21日

大燈国師550年回忌のため麻布祥雲寺へ招かれる。これより先、山岡鉄舟の願により聖上より花瓶一对を下賜され、この品席上に陳列。午餐に精進料理を出せり。帰途、笑花園に菊を觀、本田へ立寄り、汐湯に浴し、高崎五六宅で晚餐。令嬢の琴を弾ずるを聞き、巧みなるに感心す。

11月22日

吹上禁苑の麝香間へ祇候、午餐下され候につき11時30分より出頭す。近衛、中山、徳川、水戸の徳川、正親町、久我、其他なり。それから省に出て、軍艦の展覽は26日であることを確認。総理大臣、陸軍大臣、日ならずして対州出張につき、送別会を兼て省中の人々を此夜鹿鳴館に招待す。

11月23日

新燈社へ久々にて見分に赴く。製造場、大いに整頓したる如く見ゆ。一ヵ月480円位の利益ありと聞く。佐野、鈴木、関口等来る。此夜、新嘗祭18時30分頃より

初められ、およそ二時間ばかりにてすみ、また23時より始められて1時に終了。

11月24日

今日休暇を賜り、終日在宅して休息す。17時頃より松方へ紅葉を見に行き、22時過ぎ帰宅。佐久間も松方宅より同伴して泊める。長崎の旧大村領内に鉄鉞発見せるは実に日本の幸福なりとは松方の話なり。また、もと南部の人にて尾州に於て陶器の発見をなせりと。

11月25日

皇后、近衛の宮所へ行啓、香川供奉す。イギリス留学中の幸藏より発信の手紙がきて、フリガリヤ（注―ブルガリヤか）紛争厄介にて近年のうちに一大戦生ずべき趣見ゆ。

11月26日

浪速、高千穂、展覽のため行幸行啓あり、御乗艦と同時迅雷甚し、長浦御上陸なされ、還幸には高千穂へ召され、両陛下とも甲板上で連発銃の発射を御覽遊ばされたり。

11月27日

宮島と同行散歩して玉川堂骨董展覽会に行き、菓子器一個を買う。今日、伊藤の話に、昨夜欧州よりの書状中来春にかけて字仏戦争起るであろうと記してあるよし。

11月30日

伊藤へ暇乞に行く。此夜、小森沢に招かれて戸塚に行き、文海等来る。

12月1日

今朝、総理大臣、陸軍大臣等、浪速艦に乘組み、対州へ出張。

12月3日

青山御所にて御能あり。

12月4日

正午、帰宅。風邪にて外出せず。

12月5日 風邪氣にて休息。

12月6日 同右。

12月7日 本日、海軍兵学校へ臨幸。

12月8日 伏見宮、延邊館において各国公使外務大臣等を招かれ、晚餐の饗応あり。

12月9日 聖上8時30分御出発にて近衛各宮所へ臨幸。諸宮悉く武器を以て種々の裝飾をなし、欣々然として奉迎し、将校一同より酒菓を献じ、連隊長自らこれを捧げる。聖上は献上の酒を召しあがられ、御盃は連隊長へ御下げ渡しになり、各宮は皆かくの如し。還幸は夜に入つてからとなり、上よりお金を下さる。本日は君臣上下相親むの情況相顕れ、ありがたき事言うばかりなし。

12月10日 今朝、第四、第三の連隊長、水巻、岡崎の兩人、昨日の御礼に入来す。御盃に一二滴残りたるへ酒をつぎ足し、士官一同頂戴せり。昨日の臨幸は実にありがたく、永く祝日となるべし、又追々交際致したしとの事なり。岡崎は越後にて、水巻は桜井より聞き居り候など懇切な話あり、いとうれしかりし。

12月11日 昨日、山県内務大臣より近頃彗星北東に顕れ候旨書面にて奏上あり。13時より坂本龍馬、石川誠之介の二十年祭を富士見に行う。龍馬の歌、石川の詩などあり。それより橋場の北岡へ行き、税所と同車し、22時前に帰宅。

12月12日 浜離宮へ山口、米田等鴨猟仰付けられ候につき、帟治をつれて行き、鴨三羽山口から贈られる。午餐後、紅

葉館へ行き、三島を尋ね、山川から頼まれた話を話し、税所に行き、晩食。仁礼、樺山、益満、大寺、大迫等同席す。伊集院云々。

12月13日 伊藤、大山、今朝対州より帰る。新橋まで出迎えり。午後、また伊藤を訪ぬ。此夜、元田へ招かれ、佐々木、土方と同席、閑話す。支那料理の馳走なり。大宮より銀瓶一個を賜る。

12月14日 皇后宮より御召があり、今年もよくつとめてくれましたとの御言葉があつてコーヒー茶碗十二個下され候。御神楽、出御なされず。17時出御、18時前に済となされ候。(友実は)朝から終日省中にあつた。19時半、北白川宮より晚餐の招待を受け、参上。支那公使、オーストリア公使、井上大臣、山県大臣等同席す。

12月15日 四方拜の儀は朝五時にしているが来年からは六時になされては如何と申上げたところ、お聞届下さる。その際、土御門、白川等陰陽師の秘伝や書付もあつたが、炎上の折焼失なされた一段を拝聴する。今夜、有馬家の先祖を祭り、寛の一周年祭執行、食事。

12月16日 偕楽園にて元田、書経の講義禹貢今夕にて終る。

12月17日 西京行幸、御道具減少。12時より浜離宮において鴨猟あり。午餐後行き、帰途大椿楼にて中井の妻と娘に逢う。塩湯に浴す。今日、御学問所において御写真撮影なさるよう、また近衛宮所に小松宮の写真大きく云々申上げる。

12月18日 伊藤から各鎮台司令官御陪食の件を言ってくる。税所、

宮島、伊地知等来り、午餐す。そのうち北岡も来る。

午後より、四人同伴して裏通辺散歩して煙草盆等購求。晩景、百尺に上り、晚餐、恒庵の忘年会なり。

12月20日 今日在宅、無聊。

12月21日 高田より、今日寿美屋へ野津、高島を招くにつき同席せよとの招待により行くと、川村、谷元、種田等も来る。

12月22日 今夜、高崎五六の宅にて忘年会、大騒ぎなり、甚だ興あり。昨日、明宮御様子如何と池田侍医を御覧になると直ちに、聖上が仰せ候は、上が御風氣に付て也。

12月23日 今夜、税所へ行き、帰途同道して散歩、中熊へ立寄る。

12月24日 雁、二羽下賜。今夜、星岡にて侍従会あり。三条、伊藤も出席。砲台構造につき募金の話などあり、また、支那にはどういう企望があるのかなどという話が出た。

12月25日 聖上はこの頃風邪気味で出御なされなかったが、今日から出御、各鎮台司令長官は陪食を仰せつかり、先年習志野で野営なさった時の事などの話があった。税所より北岡行の事誘いがあったが行かず。恒庵来り、平川天神へ参詣、夜市を見る。

12月26日 今日、青木へ奈保飾物求めに行き、貴婦人方と段々相見え候。今夜紅葉亭にて忘年会を催し、税所、宮島、伊地知、相良等を招き、23時帰る。

12月28日 今夜、川崎祐名を訪うも不在。税所へ行く、此夜気分

悪し、肝(寒か?)気甚し。

12月29日 今夜、税所、宮島、伊地知来話。

12月30日 午餐後、高輪へ行き、お志づ殿へ金25円歳暮祝儀に遣わす。帰途、税所へ行き、高崎、伊地知、同席し、松方、宮島あとより来て快談、大に興あり。

12月31日 13時頃より参内、歳末御祝詞申上げる。奈保は両皇后宮へ拝謁、ご両所様より服地一卷ずつ賜る。14時より大祓御祭典に参上す。明宮へ参上、御手自ら羽二重一反賜る。また、久宮へ参上。ベルタンを訪問、談話数刻、奈保に面会したしとの事につき引合す。いずれも都合よき歳晩にて候。

明治二十(1884)年

1月1日 三時に起き、四時参朝、四方拝、晴、続々拝賀。今年より皇后宮御洋服を召される。16時頃帰宅。午時頃より少々不快。

1月2日 今朝も参朝、拝賀。

1月3日 今日も押して参朝、今夜高木に診察を乞う。

1月4日 今日より不参。

1月5日 不参。

1月6日 不参。

3月2日 聖上より、花瓶一個、急須、茶碗、を御土産として下賜。急須は修学院離宮の模様也。

3月3日 皇后宮に御対面、御手自ら大花瓶一对、他に菓物の作物一籠下賜。菓物は住吉参詣の折、昼食所に飾りつけ

てあつて非常によく出来ていたので特に持ち帰られたものとの事で別してありがたく、御礼申上げる。

3月4日 皇后宮より典侍をもつて奈保へ服地一卷御土産として下賜。木挽町相撲に行き、帰途、剣山、西ノ海、大泉、荒馬、を連れて大椿楼へ上る。

10月11日 大坂、京都、馬関へ御用につき出張仰せつけらる。今朝9時45分新橋発車、横浜御用邸にて暫時休息。12時前、東京丸へ乗る。幸藏、船まで送り来る。12時20分頃出発。此日、天気朗晴。

明治二十一年(1885)年

1月1日 天気快晴、寒氣烈し。午前5時参朝、四方拝に供奉。七時に御膳済む。9時30分より内廷において宮内官員朝拝。10時より表へ出御、総理大臣始め朝拝。16時滞りなく済み、17時退出。此夜、奈良原の招待を受け、奈保同伴にて行く。北白川宮、黒田、西郷、松方、山県、三島等同席す。帰路、松方と散歩して帰る。月皎々たり。

1月2日 9時過ぎ参朝。今日は陸海軍四等以下の奏任官の朝拝。本年より、一同立列の間を両陛下徐々と御通りになられた。12時退出。帰途、井上毅を訪い、暫く談話、肝要の事あるも記すを略す。午餐後、昭宮へ拝謁、また小松宮、元田へ年礼、夕景帰る。

1月3日 10時前参朝。10時元始祭御親祭に供奉し、12時前帰宅。午後、総理大臣、有栖川宮等高輪三宮を廻り、猪飼、

大脇等へ年礼。帰途、紅葉館に催す慶新会に出席し、19時ごろ帰宅。井上毅来話。

1月4日 10時前参朝、政事始内閣臨御の供奉、12時前入御、直ちに帰宅。午後、総理大臣を訪問し、政府の威権を挽回するには先ず役人を沙汰し、己を正しうし、帝室云々の事を陳述す。薩長云々、大隈井上等の話あり。それより支那公使館に行き、徐承祖帰国につき、告別し、且つ新公使へ名刺を通ず。また「イリス」に行く。汐湯に浴し、山崎にて晩食。

1月5日 新年宴会、12時前了る。井上と談合し総理、山県あるを知らず。午後、寅、仲兩人を連れて角力を両国に見る。帰途、亀清に立寄り、八日の事を頼み、直に帰る。今夜新年宴会。

1月6日 御講書初め、十時出御。福羽「日本武命東征の篇」、元田「中庸五典三徳の部」、西村「万国公法半主国、自主国の部」を講ず、各趣意面白し。

1月7日 陸軍始め、10時御出門、11時還御。今日、角力見物に行く。

1月8日 今日、書記官、侍従を角力に招待、終つて亀清に宴を開く。西ノ海、高千穂、海山等を招く。帰途、三島宅の宴会に行く。

1月9日 今日もまた角力を見物す。綾波、剣山に勝ち、真鶴が大鳴戸に勝つ。黒田の誘引にて霊岸島大黒屋に行く。副島も来る。剣山、西ノ海を始め相撲大勢来る。また、河野へ行く、利助の琵琶あり。税所病氣の旨承候

につき、一封出す。

1月10日 今日も角力見物。帰途、宮島と同道、本田へ行く、利助が琵琶会なり。明宮、御不例の由につき、御機嫌伺に参殿、格別の事にもあらせられず、安心せり。

(以上「七」完)

注

- 1 ちなみにこの日は月曜日であるが、詳細は不明。
- 2 税所敦子（一八二五〜一九〇〇）才色兼備の女流歌人、薩摩藩士 税所篤之の妻。昭憲皇太后に奉仕。
- 3 友実の東北出張（明治19・9・8〜25）につき、出発の挨拶を言う。